

ゲーテのLiedについて

中村 政雄

ゲーテの八十三年の生涯において、彼の意識的作家生活がいつ始まったかを決定することは、必ずしも簡単ではない。仮に「ゲッツ」(Götz von Berlichingen mit der eisernen Hand)の製作に取掛つた一七七二年からするも、その作家生活は六十一年の長きに亘つてゐる。而も抒情詩に關して言えば、祖父母テクストル夫妻に贈つた八才の春の元旦の挨拶は別としても、「イエス・キリストの地獄航」(Poetische Gedanken über die Hölle-fahrt Jesu Christi)が一七六四年或は五年であつて、「恋人の気紛れ」の製作より約二年さかのぼる事となる。幼時から、いわゆる形成能力(Formtalent)に恵まれていたゲーテは、年々五百頁の四ツ折版の詩集ができたとして「詩と真実」に言つてゐるように、彼に多数の幼年時代の作品があつたことは明かである。然るにライプチヒ時代において、新たな抒情詩の世界が展開するにつれて、彼はそれらの詩を悉く焼却してゐるのである。この事は彼が詩に対して、新たなエポックに達したことを意味するのであつて、彼の言葉からするも、彼がこの頃、自己の詩的天分の自覚をもつたことは明らかである。即ち、「アネットの書」(Das

Buch Anette)の時代から、彼の詩人らしい出発が始まつていると見做すのが至当であらう。もちろんその内容はロマン的な *galant* なものであるが、ケトヘン・シェーンコップとの恋愛体験なしには出来上らなかつたものである。世には、いわゆる「子供の詩」と称するものも在ることは事実であるが、眞の抒情詩が生れるには、ほぼ一定の年齢、生理的にも成熟期に達したしるしとしての、いわゆる思春期に達することが必要である。

たとえ如何に活動的な火山であるとしても、常に同じ程度に激しく火を噴いてゐるということが不可能であるように、ゲーテの場合においても、作家活動に多くの起伏の波があつたことは周知の通りである。抒情詩においては、多少の差異はあるとしても、彼の最晩年を除く作家活動の全生涯を通じて、殆ど衰えを見せないといふことができる。之を他のジャンル、例えば、戯曲及び小説に目を転ずると、むしろ、それは交互に行われているのを発見するのである。「イフィゲーニエ」「エグモント」「タッソー」等が生れた時代は小説の空白時代で、「ウィルヘルム・マイスターの修業時代」が完成された時代は、むしろ戯曲の方はスラ

ンプの状態であつた。然るに抒情詩においては、それぞれの特色をもつ所の抒情詩の種々の形態が、それぞれの時代を代表するかの様に、絶えず新しく生れて、彼の一生を貫いているように思われる。

ゲーテの作品が質において勝れていることは、今新たに取上げる迄もないが、その量と種類において豊富なことも著しい特色というべきである。殊にわれわれ日本人のように、俳人は俳句に、歌人は歌に、小説家は小説にのみ純粹に専念して、他のジャンルに目をむけることをむしろ一種の芸術の墮落と感ずるような国民にとつては、*Lied* を作り、*Ballade* を作り、*Elegie* を作り、更に *Xenie*, *Sonett*, *Epigramm* 等、時に応じ所に応じ、自由につくりこなしていることは、むしろ非常な驚異としなければならぬ。ゲーテの抒情詩は、*Xenie*, *Epigramm* 等の短いものまで集めれば、その数は恐らく二千を越えるのではないかと思われるのであるが、ここに於ては、その一小部分たる *Lied* について触れるに留まる。

ゲーテの *Lied* と称しうべきものを悉く集めれば、その数は恐らく相当に上るであろうが、今日言うところの *Lied* は、一八三〇年にゲーテ自身の手によつてなつた最後の全集の編集によるものである。詩の配列は製作年代を離れて、全体的な、総合的な、謂わば有機的というような見地からなされている。而してその数は、七九しかない。私はここに於ては、専ら、これらのリートの作品としての価値、及びそれらが他の詩の中、別けても雑詩 (*Vermischte Gedichte*) との対比に於て、如何なる意義を有

するかを考察してみたい。リートは抒情詩の中で最も一般的であり、且つ最も愛唱されているジャンルであるが、ゲーテは、一七九〇年の最初の彼の手になる全集の中の *Lieder* の序詩たる「好意ある人々に」(*An die Günstigen*) の中で、詩人というものは、沈黙していることを好まず、人々に心の中を語らずには居れぬ事を歌っている。然るに歌う対象となるものは何かというに、人間の迷い、なやみ、努力、経験のすべて、老いも、青春も、欠陥も、徳も皆その中に入ると言っている。丁度古今集の序において「やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける、世の中にある人、事わざしげき物なれば、心に思ふ事を見る物きく物につけていゝ出せるなり。」と言っているところと軌を一にするものである。

リートの内容は自ら一定の限度をもっているのであるが、では *Ballade* 或は *Gesellige Lieder* 又は *Vermischte Gedichte* と称せられているものと断然と異なるかと言うに、その中のあるものは、相互の区別が極めて曖昧なものもある。むしろ、単にリートと称せられているものの部類に属せしめた方が適當ではないかと思われるものも、多く発見せられる。私は先に、抒情詩の眞の発露は、一定の年齢、即ち思春期に達せねば起らないということと言つたのであるが、この事は、これを裏に返えせば、抒情詩は恋愛を本体とすることを意味するのである。少くとも、一般的な愛の感情、或はいうところの「もののあはれ」の感情、底に横わるエロス無しには、抒情詩は成立つことができない。殊にリートは成立たないということができる。

ゲーテの抒情詩は、彼が「ゲッツ」及び「ヴェルテル」において、一躍歐洲的名聲を獲得したようには、発表の当時においては未だその価値は認識せられなかつた。然し、既にシュトラースブルク時代において、一躍第一流の水準に到達していたのである。思うに、大多數の抒情詩人において、意識的製作活動の三・四年の頃に、一応その詩人としての生長の第一の頂点に達することは、普通の現象の如くであるが、ゲーテの場合においては、それは同時に、世界的水準に達したということであつた。然らば、どの詩がそうであつたかというに、私は躊躇なく「迎えと別れ」(Willkommen und Abschied)及び「野ばら」(Heidenröslein)を挙げる、その中でも、殊に私は「迎えと別れ」の方をあげたい。これに続く数年の間に、「さすらひ人の嵐の歌」(Wanders Sturmlied)「鷺と鳩」(Adler und Taube)「マホメットの歌」(Mahomets Gesang)が発表され、更に又「ガニメット」(Ganymed)「馭者クローノス」(An Schwager Kronos)「プロメーテウス」(Prometheus)が相次いで発表されている。大雑把な言い方であるが、ゼーゼンハイムの歌の一聯を以て、一躍ゲーテは最高水準に達し、ウェツラー、フランクフルト時代を通じて、又ワイマー前期を通じて、最も盛んな抒情詩時代を作り出している。一方、それらの詩の対象となつた女性が、フリーデリケ・ブリオーン(Friederike Brion)であり、リリーであり、シュタイン夫人であつたことは周知の通りである。以下少しく具体的に、彼のリートについて立入つてみたい。

彼のリートは先づ主観的傾向の強いものと、客観的及び民謡風

なものに區別することができ。 「迎えと別れ」「さすらひ人の夜の歌」(Wanderers Nachtlied)「ベリンデン」(An Belinden)等その他大部分の詩は、主観的な詩に属する。第二の種類に属するものは、客観の中に深い主観の裏附をもつもので、例えば、齊藤茂吉氏が厚生論の中で言っている実相観入といった趣をもつ詩である。それらは、「すべての峯々の上に」(Über allen Gipfeln)「月に寄す」(An den Mond)「湖上に」(Auf dem See)「秋のこころ」(Herbstgefühl)等が代表するもので、その数はさ程多くはない。純粹に民謡風なものも、その数は多くはないのであるが、「野ばら」を始めとして、「羊飼ひの歎きの歌」(Schäfers Klage lied)・一八一〇年作の「五月の歌」(Mailed: Zwischen Weizen und Korn)及び「発見」(Gefunden)等がある。

年代的に見ると、一七七〇年代を中心として、一八一四年代のものを以て最後としておるが、尤も、この頃から、「西東詩集」(Westöstliche Diwan)が殆まつているので、リートの製作意欲は、此の詩集によつて満されていると見做すことができる。然し、何といつてもリートの頂点をなすものは、「野ばら」「迎えと別れ」に殆まり、「さすらひ人の夜の歌」「月に寄す」「すべての峯々の上に」に至る一七七〇年から一七八〇年に至る約十年間である。而もこの時代は、一方では、「さすらひ人の嵐の歌」「マホメットの歌」「ガニメット」「馭者クローノス」「プロメーテウス」「水の上の精霊たちの歌」(Gesang der Geister über den Wassern)等の雄篇が盛んに作られた時代であ

つた。つまり *Vermischte Gedichte* として収録されているものの大部分が出来た時代が、又彼のリートが最も盛んに作られた時代である。 *Vermischte Gedichte* の中に収められている諸雄篇は、謂わば之をたとえてみれば、天をも摩すような累々たる巨巖の如きものであつて、一見、誰しもその壮大雄渾さに打たれるのである。彼の中の *Genius* が、これらの作品における程、高く羽搏いている詩はない。然しゲーテの魂は、只これらの巨塊のみを以て満されたのであろうか、成程、「さすらひ人の嵐の歌」の調べは高く、その気魄は強い。然しそれは、あまりにも男性的な、雄渾な偉大さであつて、それだけでは、ほのかな微かなものにもときめく、きめの細かいデリケートな詩人の魂は、満されぬものがあつたのではなからうか。こういう意味において、 *Vermischte Gedichte* の中の諸雄篇の男性的であるのに反し、

リートは、彼の詩の女性的存在であるということが出来る。謂わば、頂は白雲の漂う巨巖のその根方に咲く堇の花の可憐さが、彼の

3) リートの性格であると言える。

Wenn du nicht verlässest, Genius,

nicht der Regen, nicht der Sturm

Haucht ihm Schauer über Herz.

と「さすらひ人の嵐の歌」において、若武者が戦場において、敵の大將に一騎打を挑むかのように、意気揚々と *Genius* に呼びかけているのであるが、一方「迎えと別れ」においては、母の乳房に顔を埋むる幼児のように、恋人の前には何の擬態も用ういとまはないのである。全く堪え情もなく、甘やかされた只の坊ち

やんに過ぎない一人の青年の、真情のみを吐露している。その気持は、

4) *Es schlug mein Herz; geschwind zu Pferde!*

の第一句に最もよく現われている。殊に、 *Es schlug mein Herz* は端的に素朴である。激しき、調べの高きは勿論詩においては必要であるが、対象そのものの持つそれぞれの感じを感じとることも、亦それに劣らず詩人として欠くべからざるところである。この意味に於て牧水が「わが登る天城の山の後ろなる富士の高きは仰ぎ見あかぬ」と雄渾に歌っている反面「かたはらに秋草の花語るらく亡びしものはなつかしきかな」と可憐な一面を捉えていることは、歌人としての彼の素質を語るものである。ゲーテは、 *Es schlug mein Herz* にいつつ、

Es war gethan, fast eh' gedacht;

Der Abend wiegte schon die Erde,

Und an den Bergen hing die Nacht:

Schon stand in Nebelkleid die Eiche,

Ein aufgestürmter Riese, da,

Wo Finsternis aus dem Gesträuche

Mit hundert schwarzen Augen sah.

と、たそがれが地上に迫ることを歌つておる。 *wiegen* という独逸語は、日本語の只「眠る」とか「ねむらせる」とかいうことばではその含蓄は現わしえられない。この言葉は「ゆりかご」を通して、直ちに西洋人の生活と直結しているのである。それは我々が、「おんぶされる」ことによつて、なつかしい幼時の母の

背中を思い出し、同時に、ねんねこや肌のにおい等、幼時の生活一切とつながるのと似たものである。更に櫛の木を、「霧の衣を着て立つ巨人」というような擬人法をもつて現すことも、特殊な情緒を呼び起す。

詩の作品価値の上からも、ゼーゼンハイム時代が境を画するころとは、一般に言われているところである。その中でも、はつきりと作品にすぢ金が入つたのは、「野ばら」及び「迎えと別れ」あたりからである。ライプチヒ時代の初期の作である「アネッテ」(Anette) は別としても、リートとして収録されているライプチヒ時代の作品、即ち「初夜」(Braut Nacht) 「美しき夜」(Die schöne Nacht) 「意地悪き喜び」(Schadenfreude) 「幸福と夢」(Glück und Traum) 「よろこび」(Die Freuden) 「うつり変り」(Wechsel) 「死んだふり」(Scheintod) 等のあらわしている世界は、尙、アナクレオンのガランテリー(Galanterie)の世界である。例えば「初夜」においては、結婚の初夜を歌っているのであるが、

「寝室では祝宴から離れて、アモールが新郎に忠実に仕えていて、やんちやな客人たちが新床の平和を乱しはしないかと心配している。アモールの前には、神秘的な光を放つて焰が燃え、室には、初夜の樂しみを助けるように、香の烟がうずまいてゐる。時の鐘が鳴ると、新郎の心臓は高鳴る。花嫁の唇を求めて彼の心は燃える。二人は臥処に急ぐ。番人の手にある火は行燈のように小さくなる。彼女の胸、彼女の顔は雨のような新郎のキスに震える。さて新郎の大胆さが必要な時となると、彼女のきびしさは慄る。

えと変る。アモールはさつと彼女の衣を脱がしてやる。新郎もそれに遅れない。そしてアモールは意地悪気に、又つつましく両眼をつぶる。」

という内容である。これは一つの例であるが、この詩の特徴は、第一に官能的であり、且つ空想的、技巧的である事である。而も技巧も、「西東詩集」におけるような表現上の技巧でなく、フィクションの上になされていることである。然し、空想的であるにしては、この官能は活々としておる。そこにこの詩の生命があると思われるのであるが、空想的であることは、一方から言えば、まこと或は自然さというものから、遠ざかっていることを意味する。いわば、このガランテリーは、ロココ的裝飾趣味と共通するものであつて、デイルタイが彼の「詩と体験」の冒頭に「あらゆる時代の詩的作品は、前代の制約をうける。以前の手本が働きかける」と言っている通り、天才ゲーテにして尙、ライプチヒ時代の体験を以てしては、「前の手本」からの影響を脱しえなかつたのである。そして彼が本然の真を発見する為には、シュトラスブルクの大寺院において「独逸的芸術」の本質にふれ、ヘルダー(Herder)の答と、フリーデリケ・ブリオーンの愛の浄化が必要であつたのである。

先に挙げた「初夜」は一例に過ぎないが、この時代の一連の詩は、多少の差こそあれ、空想的で、アナクレオンので、洒落或は氣取りの恋愛遊戯であるという点においては共通である。然るに、同じくライプチヒ時代の体験を基としているにしても、フランクフルトにおける病氣休養の時代になると、詩はしづかな回想の中

によみがえり、彼のリートは自然さを加えてくる。この時代の作品は、「離れて居る喜び」(Glück der Entfernung)「生々しい思ひ出」(Lebendiges Andenken)「月へ」(An Luna)「純潔」(Unschuld)「河のほとり」(Am Flusse)「金の首かざりに添えて」(mit einem goldenen Halskettchen)等である。伝記の上から見れば、ケトヘン・シェーンユップとの恋愛は、彼のはげしい嫉妬の中に失恋に終っているが、作品の上からみれば、「恋人の気紛れ」にしろ、リートにしろ、痛々しい失恋という痕跡をとどめてはいない。むしろ、戯曲においてにしろ、リートにおいてにしろ、恋のたわむれの方がより多く前面に押し出されている。只然し、第二期のフランクフルト時代になると、ケトヘン・シェーンユップの体験も、静かに一つの体験として顧みられている。従つてこの時代は、静かではあるが、真面目である。沈潜的であるが、より多く真情を伝えている。「現実に見る眼はとかくだまされ易いが、離れて思う人の像は慰めである。」(Glück der Entfernung)と歌い、月に寄せて、遙かな思を述べるのも、回想の中のケトヘンへである。(An Luna)又「川のほとり」においては、やりきれぬ失恋の寂しさを歌い、「純潔」の内容は、一応恋をはなれては居るが、純粹なもの、微かなもの、ひそやかな、ほのかなものに惹かれる病床のデリケートな心を捉え、「生々しい思ひ出」においては、恋人のかたみの髪のを、自分の恋敵と見立てるあたりは尙アナクレオンの的であるとしても、その底にこもっている真情は否定し難いものである。

ここに大雑把に、主として彼の初期の作品について私見を述べたに過ぎないのであるが、多くの詩人においてそうであるように、初期の作品における内容と形式の不一致、或はあぶら気の過多とも言ふべきか、精練しきれないことから生じるあくの過剰ということは否定しきれないものがある。「迎えと別れ」の如きも、すぐれた作品ではあるが、尙、いわゆる年輪の少ない作品であることは致し方のない事である。彼のリートは、「さすらひ人の夜の歌」「すべての峯々の上に」及び「月に寄す」を含めて中年以前の作品であるので、水々しい、或はあぶらの乗つた作品であるという一面、これも亦、まだ年輪の点では手柔い感じを残していることも否定しえないところである。然し、一八〇二年の作になる「羊飼の歎きの歌」あたりになると、すっかりぜい肉は削られて、引緊つた瘦身となり、内容と形式は、完全に無理なく一致してくるのである。濃厚な恋愛を主題とするに拘らず、「西東詩集」殊に「ズライカの書」等においては、も早過剰なものは見当らず、リートは詩形的な美しさというものが、殊に目立つてくる。リートは一応一八一四年の「おたがひさま」(Gleich und gleich)を以て終っているが、更に「西東詩集」の中に生きていると考へたい。

註

- 1 Ernatinger; Die deutsche Lyrik seit Herder. S.134.
- 2 Was ich irrte, was ich strebte,
Was ich litt und was ich lebte,

Sind hier Blumen nur im Strauß;

Und das Alter wie die Jugend,

Und der Fehler wie die Tugend

Nimmt sich gut in Liedern aus.

3 Wanderers Sturmlied の中の始めの三句（大意）

守神、汝の捨てざらん人は

雨のうち、嵐吹けども、

心に恐れの慄きあるなし。

4 Willkommen und Abschied の第一句

5 右につゞく第二句以下第一節（大意）

胸はとどろく、いざ馬へ！

思つた時は、乗つてゐた。

既に夕べは地をゆすり

山の端に夜は迫つてゐた。

櫛は聳え立つ巨人のやうに

霧につつまれ立つてゐた。

聞は木の根の繁みから

百の黒い眼で覗いてゐた。

6 Wilhelm Dilthey, Das Erlebnis und die Dichtung.
S. 1.